

# Very Very Well-done

|    |                                |      |
|----|--------------------------------|------|
| 4  | <i>DevilAstarote</i>           | 727  |
| 5  | <i>Country Courtney</i>        | 233  |
| 6  | 蝶 <i>papillon</i>              | 351  |
| 7  | <i>Rock'n Roll Love Letter</i> | 301  |
| 8  | 豪奢なる修羅の戯                       | 1007 |
| 9  | <i>Wings</i>                   | 539  |
| 10 | <i>Elegy</i>                   | 324  |
| 11 | 湖上の城 <i>Ragnarok</i>           | 1224 |
| 12 | 殷弩羅 इंद्र                      | 1305 |
| 13 | <i>Harp</i>                    | 027  |



*Siveeyeah*

Very Very Well-done.....

その言葉から叭羅蜜斗はらみつとが連想したのは（解釈が正しいかどうかは全く別として）よく焼いた（焼き過ぎてしまった）、ジューシーさのない、すなわち *hard* な、硬い4ポンドの牛肉の塊だ。

彼がそう説明すると、

「ああ、いいぜ」

イタルは言った。裂いれつは不敵な微笑を泛べただけであつた。普肅ふしやうは頷き、「君たちに反対意見がなければ僕に異論はない」と静かに言う……

この瞬間、決まったのであつた。

その頭文字initialを取って『v v w』、これをバンド名とした。ちなみにv v wを「クオドルブル・ヴィ The Quadruple V（4倍のv）」と読むのはvが4つあるからだ。すなわちwとはvが2つあるを以てダブル double と謂うので、計4つのvがあることになるからである。

天易真あまやすまこと今は悩まされていた。いま頃になってメールが絶えることがないからだ。いまさらなぜだ。率直にそう思った。アプリ化したのですら、もう5年も前じゃないか。それがいま頃。

『「人間存在の實存的分析による存在論考―「空」』。これが彼の著作である。原本はよき和紙に筆で手書きした和綴本で、この世に一つしかなかった。これを汎用にするため、友人であつた天平普肅あまひらふしやうが原版を作製し、印刷にかけ、上製本とした（これをオリジナル版、又は天平本という）。

その後、友人ら地元の有志らの手でデジタル化し、その際、関連資料や装飾や音声や動画や画像などを附加し、App 版を作製、ネット上にアップロードする。そしてこれに併せて天平本もApp 版に附加された文章などを添え、新オリジナル版としてネット上にもアップロードした。

※<http://syiveeyh.q2.xrea.com/index.html> (新オリジナル版があるhomepage)

それ自体は大して珍しいことではない。問題はその天啓の源となったものであつた。真分はブログにかく記している。「イタルの生きざまが小生の魂魄にインスパイアされた。かくして小説は書かれた……」

この世は空莫である。この空莫に確信をもたらすものは何もない。しかし生きなければならぬ。だから人は堂々と果敢すべきなのである。それが小説の真髓であり、真分がイタルから受けたインスパイアであった。

「常軌を逸した行為、人の世の愛すらも否定するかのような逸脱した行動。だがそのインパクトには理性では解明できない実存の Presence があつた」

解散した v v w はインディーズですらなかった。彼らを観たり聴いたりしたと言う人はその曲やパフォーマンスを投稿形式の動画サイトで観聴きしたに過ぎない。ステージを観たと言える人は70億人の中で数十人しかいない。

ステージと言っても、ただ一度しかない。しかもライブ・ハウスへの出場権をかけたコンペティションで、いわば公開されたステージング・テストであつた。

十七歳のイタルはそのステージで数千万円相当の機材を故意に破壊した。すなわちギターを叩きつけて壊す。それが最初のパフォーマンスだった。最後のステージングでもある。そのせいでライブ・ハウスはしばらく使いものにならず、店の営業者はもちろん、バンド仲間などからも激しい非難を受け、莫大な損害賠償請求によつて家族に負担をかけた。その次には、顔の左半分が青龍の刺青を和彫で彫った上に、公園でゲリラ・ライブを強行、しかもガソリンを撒いて火を放ち、警察沙汰になる。

最後は。

バンドが解散したのは彗<sup>い</sup>之イタルの死が原因だった。享年17歳、古代の聖地における死、2千7百年前からの聖域であつた真神山の頂にある石刀のような、縦に長い磐の垂直の壁を独り登り（足場も道具もなく、どうやって登ったかは未だに謎である）、ガソリンを被つて飛び降り、あたかも炎の彗星のように天翔け、イカルスのように墜ちた。死の理由も意味もわからない。彼が何を目指し、何をしようとしていたか、わかる者などいるはずもないのだ。それが最後のパフォーマンスであつた。

彗星のように突然熾り、唐突に燃え尽きて消えた。

真神郡というマイナーな地域での事件であつたにもかかわらず、ロコミで広がったその伝説的な、カリスマ的な、今日では稀有となった過激さ、バンド・メンバーや周囲の協力

者によってユーチューブなどの動画サイトにアップロードされた数々の動画によって、次第に世に知られる存在となっていた。

かくして急遽巻き起こったイタル・ブームが真今の小説にまで飛び火したのである。

オリジナル・メンバーによるv v w復活の話が急浮上した。イタルに替わってヴォーカルをやらないかと打診された彝之龍<sup>りょう</sup>肯が大いに逡巡したのも当然である。イタルの代役など地上の人間にできるわけがない。しかも彼以外は皆、当時のメンバーなのである。あまりにも荷が重いと言うか、そもそもが不可能なMissionであった。

「声質も容姿も似ている」

そう言われた。確かにそうかもしれない。同じく彝之家の者だからだろうか。似てはいた。しかしキラクターは全く別だ。できるわけがない。イタルの過激さと死によってv v wは伝説化していて熱狂的な信者がいる。ムリだ。龍肯がそう思ったのは当然であった。しかし結局、彼は引き受けた。諸先輩に言われて引き受けざるを得なかったという事情もあるが、最終的に決断したのは半端な自分の人生の転機にしたいという、ありふれた、曖昧模糊で、脆弱な理由からであった。しかし肯諾してからすぐに後悔した。

「じゃあ、4、5曲くらい、作つてくれ」

スタジオ入りまではわずか1ヶ月。寝食も惜しんで、作詞や作曲に没頭しなければならなくなったのである。

とは言え、所詮、天平普肅の実家のスタジオで録音・録画し、それをネット上にアップするだけのことである。非常にプライベートなものだ。ユーチューブに動画をアップするのと何ら変わらない。しかも従前もやったことのある全く同じ手法で、龍肯が感じているようなプレッシャーを感じるようなものではないはずなのだが、伝説のイタルを、ということで、激しく緊張していた。大学にも暫く行かず、完全に自室で創作に没頭していた。ブルース・ハープ Blues Harp (ハーモニカの一種)の練習も欠かさなかった。ユーチューブでイタルがハープを吹くのを見たことがあり、強いインパクトを受けていたからだ。イタルはうまくはなかったが、彼にしかない鬼気迫る何かがあった。あれがでなくてはならないという念いに囚われ、唇に血が滲んだ。

あの異常さを表出したい。そう 冀<sup>いねが</sup>い焦燥した。何かをつかもうと足掻き藻掻く。

何度も聴く。そして不思議なことに気がついた。イタルは歌いながら吹いていたが、歌声とハープの音とが同時に(すなわち重なって)聴こえる瞬間がいくつかあるのだ。

「あり得ない」

信じられなかった。しかし聴けば聴くほどそうとしか聴こえない。自分でもハープを吹きながら歌い、それを録音し、再生し、そんな風に聴こえることがあり得るか試した。いろいろやってみたが、予想したとおりそんなことがあり得るはずがなかった。

そんな疑問を或る日、<sup>すく</sup>ベ裂にぶつけてみた。だが彼は嘲笑的な笑みを浮かべて肩を竦め、こう言っただけであった。

「Il divino Michelangelo !」（神の如きミケランジェロ）」

あまひらふしやう

天平普蕭は茫然としていた。

今回の企画、すなわちバンドの復活、具体的には、往時の楽曲のいくつかを選んでリメイクし、また未完成曲のいくつかを完成させ、新しいメンバーで新しい曲を作り、アルバムにしてネットにアップしよう、と提案したのは彼であった。心は何かに囚われている。

しかしいまこの時点で、何も作る気が湧かなかった。いざ実行しようとすれば、聖域に踏み入るような気がしたし、あの頃のようにには到底なれそうになかった。スタジオにはチャリー・パーカーCharles Parker Jrやマイルス・デイヴィスMiles Dewey Davis IIIが流れていた。ジョン・コルトレーンJohn Coltraneやディジー・ガレスピーDizzy Gillespieが続いた。

彼らのサウンドは楽曲でありながら語りかけるようであり、管楽器の演奏でありながら肉声による、迸る歌のよう、いや、どちらかと言えば（奇妙な言い方だが）歌で喋っているかのようであった。抽象絵画のような味わいがあり、ダイレクトに思考や感情が伝わる。

「Artisticだ」

そう吹き、こういう曲が作りたいと妄想した。Artisticな曲で構成されたConceptualなアルバムに仕上げたい。漠然とではあったが、そういう全体イメージ的な構想が髣髴と湧き上がってきた。

彼の住む天平家本家は眞神の水田の真ん中にあり、27225坪の敷地に、曾祖父母が使用人らと住む大母屋、祖父母が使用人らと住む母屋、父母と普蕭<sup>はなれや</sup>ら兄弟の住む離家など十数棟が点在し、北奥には奥津城、すなわち祖先の塚と社がある。

ちなみに敷地の近隣には、田圃を挟んで大叔父や叔父夫妻の住む2451坪の敷地など、同族の敷地がいくつかあり、村の者がこの一帯を天平本郷と謂うも理であった。本郷は全体を川の支流によって環状に囲まれていた。よって川は天平濠川と呼ばれた。

その中に、高校時代に祖父に建ててもらったスタジオがあり（本家敷地が広過ぎるせいで、建設中、親は一切知らず、竣工の日にあれよと驚愕したというエピソードがある）、バンドの録音撮影はこで行われる予定であった。

普簫はパソコンに繋がった鍵盤の前に坐っている。周囲にはさまざまな民族楽器（宗教的な法具もあった）を置き、さながら錬金術師の実験室のようであった。機材も豊富だ。その上、スタジオはイタルの死後、バンド活動が停止しても、さらに設備が加えられ、建物自体も拡張された。簡易宿泊室や休憩室、資料室や楽器室、ライブラリーなどが主な増設箇所だ。建坪は百坪になった。彼はそれでも飽き足らず、サブ・スタジオを造る計画をも持っているが、既に環境は十分だ。しかし一向に捗っていないかった。

デスクの右傍らに羽ペンとインク壺がある。家紋が刷り込まれた5線紙に、クリスタルのペーパーウエイト、飲みかけのコーヒー、銀製のコーヒーパーポット、ブライヤーのパイプ、葉巻の木箱、ワイルド・ターキーのボトル……虚しく皆沈黙している。

普簫はふと羽根が額を撫でたかのようなインスピレーションを感じ、鍵盤を叩く。憂いに満ちた曲だった。キーを何度か変えてみたが、<sup>#</sup>Cmで始まるスローな曲に落ち着いていく。

「違う、このタッチじゃない、もっと優しく、リアルに、派手じゃなくて……」

やがてそれは涙に濡れたまつ毛がゆっくり上下するように、華麗な羽をスローモーションで動かすアゲハ蝶。同時に憂鬱な雨の曇天。11月頃のパリ、モンマルトルの階段の風景が彷彿とした。少しイメージを追って修正するうちにアンニュイな、古いシャンソンのような音色になった。しかしそれ以上進めない。

「行き詰ったな。何かすつきりしない。しかしこれ以上いじればオリジナルの感情が、言葉にできない、あの舌の縛れるような感覚の最初の衝動や感激が壊れてしまう。魂が疲弊してしまったようだ。これ以上はできない。この見極めが肝心だ。」

さあ、少し目先を変えよう」

クラウド・メモリー・サービスに保存した。こうしておけばスマートフォンでいつでもどこでも聴ける。デスクに戻ると5線紙に16小節ほどのイントロだけ書きつけた。これには特に意味はなかったが、No.124とナンバーを殴り書きする。鉛筆でPapillonとフランス語で書き添えて。

フラトキヤスター「Fender Stratocaster」を突っ込んだ葬<sup>いのいれ</sup>之<sup>つ</sup>は裂は火の点いていないシガリロを  
啜えながら操縦桿を右に切り、天平家の門をくぐった。

老大樹の間を縫うように進み、スタジオの近くに適当に停めると、ギターを担いでスタジオに入る。

「よ、普蕭、龍肯、やっぱり叭羅蜜斗は遅刻か。ふ。しかし久しぶりだな、ここに来るのは。あゝ、時間ってえのは不思議なもんだぜ。なぜ過去があるのか、なぜ未来が。とどのつまりは、なぜこの様式なのかってことだ。誰にも…わかりっこねえ」

ギターを置いて、スタジオを見回す。

「過去か。時間ってのは、甦り方もまた不思議だ。匂いなんだ。生物にとって、とても古い感覚、嗅覚だ。それが一番直截的に過去を甦らせる。

たぶん嗅覚と触覚は最初に発達した感覚に違いない。生物にとっては根源的な感覚の1つなんだ。しかしなぜ嗅覚だったんだろうか。それも結局、誰にもわからない。ふ。わからないことだらけだ。しかしともかく、それが懐かしさを第一に引き出す。それは間違いない。

そうさ、思い出させるぜ。ひと頃ずいぶん根詰めてここに籠ったよな。突っ走ったもんだ。まだ17だったんだな。ありありと思い出さず。あの火のような、焦燥の日々を。

さ、始めるか」

しかしベーシストの叭羅蜜斗は到着しなかった。誰も曲を作って来てはいなかった。それを自分から言い出す者もいなかった。実際、普蕭と龍肯とは全く何も考えていないわけではなかった。メ裂は考えていなかったし、まだ来ていないが叭羅蜜斗が考えて来ないのは普段の言動から考えて明白であった。普蕭と龍肯が出さないのは未だ出せるほどになっていないからだ。

「テスト・レコーディングしてみたいんだ。龍肯、ハープ (Blues Harp) を吹いてみてくれ。そう、そこに立って、マイクに向かって」

普蕭がそう言った。

「わかりました」

普蕭もメ裂も叭羅蜜斗も、龍肯よりは年が上だった。素直に真ん中のスタンド・マイクの前に立つ。ポケットからハープを取り出した。寒い季節ではないのでリードを暖めておく必要はないのだが、ハープの練習をするようになって以来、ジーンズのヒップ・ポケットに突っ込んでおくという感覚が好きで、ずっとそうやっているのである。

「じゃ、適当なやつを吹きます。自分が練習用に作ったフレーズです。いいですか？」

普薫がミキシングルームで応える。ズ裂もミキシングルームに下がった。

「おう、OKだよ。さあ、やってくれ」

ハープを両手で包むように持って、唇を強く当てる。最初の3つ音を半拍ぐらいの一瞬の間に鋭く鳴らす。ストローを吸うように的確に孔から空気を強く吸い、強く吹き込む。ベンディングだ。半音下がる。同時に音がやや歪み、ミュートする。

今度は歪みの音程的な不安定さを残しつつ、音を長く伸ばす。ある種の緊張感が生じる。

宮本武蔵の枯木鳴鶴図の中で、鶴が止まった、細く長く縦に伸びた枯木の緊張感に似ている。再び激しくベンディングしながらミュート効果を持たせ、ビブラートを掛けつつ、短い叫びのように吹きまくる。心は必死でイタルの姿を描いてそれを追っていた。

終わると、ズ裂が、

「特に何がいいわけでもないが、何かいいな。」

素朴というか、何でもないよさみたいな……変なたとえだが、茶の湯の世界で中国や朝鮮では平凡な実用の雑器だった茶碗や壺がたまたま当時日本の侘び茶の感性に合致して、『寂びて、枯れて、凍えて、冷えて』と称讃され、茶の湯の席でうまく見たてられ、名品となっていた、みたいな感じが、ある……かな。

象徴的に、コンセプトアルな意味で、アルバムの最初にプロローグ的に挿入してもいいんじゃないか。んで、タイトルはHarp っつんで、どうだ？」

そこに叭羅蜜斗がベース・ギターを担いで入って来た。金髪のスパイキー・ヘア、乱れた雲丹のような短髪だ。破れて安全ピンで留めた長袖Tシャツ、ハーケンクロイツのマークが入っている。袖は長過ぎて余り、余った部分を折り返して止められ、手が出せない。黒い革のパンツと鉾の付いたジャケット、タータンチェックの汚れて切れたバンダナを尻のポケットに粗雑に突っ込んでいる。

「よ、そろってんな。ん？ どうしたんだ、神妙な顔してよ？」

普薫はその問いを無視するかのようにズ裂に伝える、

「真意はよくわかったが、僕にはある深い意味で、Blues が聴こえた。むしろ最後に添えてはどうか、Blues というタイトルで」

叭羅蜜斗が怪訝な顔で、

「おいおい、シカトかよ」

ズ裂もまた気が附かぬかのように普薫へ言う、

「まあ、焦らなくてもいいだろう。最終的に全体を一望してから決めようや。他の曲とのバランスつてもんがあるじゃないか。それに俺も今おまえの意見を押し退けて自分の考えを通せるほどに全体が見えているわけじゃない。とろいのは嫌いだが、拙速は避けようぜ。よく気をつけてよく考える、短い時間だな。思慮の深さと時間の長さは比例しない」

叭羅蜜斗が、

「おい、どこまでシカトだよ。まあ、いいや。オレ、ちょっと考えたんだぜ、リフをよ。そのレスポールを貸してくれ、普肅」

彼はギブソンのレスポール・モデル Gibson Les Paul Modelを受け取ると、GとCを繰り返すリフをかき鳴らし始めた。「何か聴いたことあるな」

べ裂がつぶやく。普肅も、

「そうだな、何だろう。’70年代っぽいかな?」

べ裂はそれ以上言わず、自分のギターを抱え、奏で始める。

G C G Cと弾いてから(彼のギターはオープンGにチューニングしてあった、E<sup>b</sup> C A<sup>b</sup> B<sup>b</sup> Cと続けた。「どうだ?」という顔をしてからもまだ黙って続け、各コードにsus<sup>4</sup>を入れたりもした(A<sup>b</sup>のトコはsus<sup>4</sup>ではなくadd<sup>9</sup>を使う)。その間、他の者は黙ったまま、見ていた。やがて叭羅蜜斗がギターを置いて、ベースを弾き始める。遂に普肅が、

「いいんじゃないかな」

ようやくそう言葉を挟んだ。「普通のアルバムならオープンGに使えそうな曲だ。ノリのいいロックン・ロールだ」

叭羅蜜斗は、

「だな。だからオープニングには使わないようにしようぜ。何十年も前からそのパターンばつかりじゃねえか。王道過ぎるぜ。ま、そうじゃないアルバムもあるけどな。でも、少数派さ。ノリのいいオープニング、印象的なオープニング、けつ、クズだぜ。商業主義だ。ロックは巨大産業さ。ロックは死にしまったんだ」

「という幻想もあるよね。Rock is dead か。80年代にもそんな言葉があったんじゃないか。ロックは最初からショービジネスだった。そういう意味ではジャズはまだよかったし、ブルースの原初はそれ以上だ」

普肅が皮肉な微笑を泛べて言う。べ裂はそれを無視し、

「じゃ、もう少しブルージーにするか。さ、いいから歌詞をつけろよ。叭羅蜜斗、どんなイメージなんだ?」

「別に、説明できるようなイメージはないさ。オレは小説家じゃないんだぜ。言葉なんかチープだ」

「わかった、わかった、じゃ、弾くから適当に歌え。あー、とか、うーうー、でいいから」  
「ああ、わかった。できとーにイクぜ」

普薫がドラムセットに坐った。スネアとタムを叩き、ハイハットを響かせる。ベ裂が立ち上がってプレイし、叭羅蜜斗は腰のあたりまでベース・ギターを下げてピッキングする。彼ら3人と違って初めて参加する龍肯はどうしていいかわからず戸惑っていた。2、3回練習してから普薫が声をかける。

「龍肯、歌詞を作っておいてくれ。うちじゃそれが原則的にヴォーカルの仕事になっている。タイトルはGet Freeでいいよ。何のしがらみもない、って感じかな」

翌日、普薫が皆に譜面を渡した。普薫以外は楽譜を読めないが、コードだけはわかった。「『パピヨン Papillon』っていう曲だ。初めはアンニュイで憂鬱で mellow な感じにしたんだけど、いじりにいじっていたらサイケな感じになったんだ。

分数コードが多いから気をつけてくれ」

「1回、軽く弾くか歌うかしてくれよ。オレらは楽譜見てもテンポとかわかんないから」

「サイケなら少し民族っぽい音やデジタルなサウンドを混ぜようぜ。加工も必要だから少しゲストを呼んだ方がいいぜ」

ベ裂が言うと、普薫も

「僕も最終的にはそうしようと思っている。けど、まず僕らだけでやってみよう。バンドの曲だから、やっているうちにサイケな曲じゃなくなるかもしれないじゃないか」

「オーケー。ともかくこの lyric を歌ってくれ」

夢の中のバタフライ 蒼い碧い穹（そら）を ゆらゆら渡る 渡る 海峡を

青い 荒れた 広い 海を 海峡の

胡蝶のような 荘周の夢に舞う ひろひろと なひろと さくらのように

青い 紺い 翠い 蒼穹に桜花爛漫 百花繚亂 金欄緞子 錦繡の紅葉 秋の吉野

嵐山 渡月橋が パピヨンが はびはびと ひびひび ゆひゆひと

ゆれ

「ふーん、わかったような、わかんないような」

叭羅蜜斗が言うと、ベ裂は、

「全然わかんないだろう。いいんだ。おまえが以前、言ったとおりだぜ『Talk is cheap』や」

「ぐだぐだ言うなっぺことか？」

「言っちまったら風情がない」

「あ？ 風情？」

叭羅蜜斗が眉を顰めると、龍肯が、

「あ、あの」

と言葉を挟んだ。おとの

「これは歌詞ができているようなんで、僕は……歌詞を作らなくてもいい、っぺ考えていいですか」

普蕭が憂げに振り向く。

「いや。」

君が歌いやすいように変えていい。君の解釈で。それがヴォーカリストの仕事だ。最終的にはバンドが作る。それだけのことや」

何度かやっていくうちに叭羅蜜斗がベースをダブル録音した。ベ裂はさまざまな楽器をオープンリールのテープに録音し、古典的な録音テープの逆回転を行った。普蕭はハーディングフェーレ Hardingle (ノルウェーの擦弦楽器。バイオリンよりやや小ぶり。四弦の下に4、5本の共鳴弦がある)やヴィオラ・ダモレ (viola damore)、チェンバロなどの古い鍵盤楽器を持ち出したり、森や川のせせらぎや街の喧騒などを録音してデジタル的な処理を施して挿入したり、さまざまな音の貴石を作り上げてモザイク的に鏤めた。龍肯はファルセット (裏声) を多用し、多重録音による独りコーラスを作る。そのコーラスを聴いて、

「やめろや」

叭羅蜜斗がベースを止めた。

「出来そこないのビーチボーイズみたいだぜ」

「コーラスがダメっぺことか」

ベ裂が面白がっているかのように、そう訊いた。龍肯は落ち込んだ。しかし叭羅蜜斗は容赦ない。

「ああ、だせえぜ」

「俺もそんな気がした。少し変えないか、普蕭」

「いいけど、どんな風に？」

「トーキング・モジュレーター」Talking modulator とか使っちゃ、どうかな。」

「あゝ、いいかもね」

トーキング・モジュレーターとはエフェクターの一種で、トーク・ボックス Talk box という。

エレクトリック・ギターやシンセサイザー等の楽器の音を、専用のスピーカーからビニールチューブなどを通して演奏者の口の中に導き、そこで共鳴させ、その音をマイクで拾う。すると口の形に合わせて音が変わり、楽器の音で喋っているかのような効果が作れる、という機材だ。

早速、普薫が機材倉庫から出してきた。ズレが悄然としている龍肯の肩を叩く。

「自信持ってやれよ。そうすりゃ、それらしくなる」

実際、試すとまずまずの出来だった。

「うーん、いいかもな」

叭羅蜜斗が5人くらい食べた後の猛虎のように満足気に唸った。

その翌日、龍肯が着くと既に叭羅蜜斗がいた。

「よお、だいぶ慣れてきたか？」

「いえ……」

それより歌詞作りがプレッシャーで……」

それが実情だった。ヴォーカルが原則的に歌詞を作るっていう話は聞いていなかったからだ。

「ふうん」

叭羅蜜斗は興味がないようだった。そして何気なく、床に落ちていた紙切れを拾う。眺めてからベースをおもむろに奏でた。「ふーん」

そう言ってまた弾く。もの哀しいメロディだった。叭羅蜜斗らしくない。意外だった。

「叭羅蜜斗さんが作ったんですか」

「いや。コード進行の書かれた紙が落ちていたんだ。テンポがわからなかったが弾いてみた。いい感じだ」

「そうですね。意外性もあって……」

「意外性？」

「あ、いや、別に何でもないんです」

「そうか。意外性はないだろ」

「そ、そうですね。クラシカルな、まるで弦楽4重奏みたいな……霧雨のパリ……的な感じですか」

「何だ、それ。古い映画みてえだぜ」

そこに普肅が入って来た。

「それいただきだな。It was raining in Paris にしよつ。」

「こういう感じの曲なんだ」

彼はピアノの前に坐り、弾き始めた。龍肯が想像よりゆっくりしたテンポだった。鍵盤から伝わって打たれる絃の音の響きは一音一音が明晰だが、全体に霧のような雰囲気がある。

「最初はサイケな曲で構想していたんだが、計らずもそのモチーフは『パピヨン』の方に使っちゃってね。」

じゃあ、ってんで思い切ってヘビメタにしたんだが、いろいろと構想が膨らんでね、交響曲のように複雑で長大な歴史詩篇、一大叙事詩に仕上げていったんだが。途中で興が尽きてね、その叙事詩のエピソード的な一小詩篇のみを残し、この曲にしたんだ。

古い石造りの街、欧州的な、そして憂鬱、晩秋の霧雨、セピア・カラーの古写真。そんなイメージを漠然と感じてはいたけど、自分では、はっきり決め難くてね。お蔭でイメージがまとまったよ。ふんふん。

まあ、そう言うことさ、じゃ、歌詞、頼むよ、龍肯」

「あ、……はい」

ズレがフォークギターを持って入って来てスツールに坐り、弾き始めた。終えて訊く。

「どうだ？」

「カントリーかい？」

普肅が尋ねた。

「まあ、そんなところだ」

その応えに対し、叭羅蜜斗が、

「ブルースかと思った」

「まあ、カントリー・ブルースってとこかな。コートニー・ラブ Courtney Love のライブを観ていたら、ふつとね、泛んだんだ。そのとき聴いていた曲はもちろん、彼女の音楽ともほとんど繋がりはないんだが、泛んだのさ」

コートニー・ラブはUSAのミュージシャンで、ホール hole というロック・バンドのヴォーカル&ギターを担っていた。そしてカート・コバーンの妻として有名である。カートはニルヴァーナ Nirvana のヴォーカリスト兼ギタリストだった。ニルヴァーナは1994年のカートの自殺で活動を停止したが、未だに伝説的、カリスマ的な存在で、世界のアーティストにインパクトを与えている。ニルヴァーナは仏教の涅槃の境地を表わす語だ。

カート・ドナルド・コバーン Kurt Donald Cobain (ちなみに発音的にはコベインとする方が正しい) は1994年、自宅でショットガン自殺した。享年 27 歳。

カートはメジャーでのデビュー・アルバムから大成功を収めたが、アンダーグラウンドなロックをルーツとする彼は成功に自分の信念を裏切ってしまったように葛藤を感じていたという説がある。

奇しくも27歳という年齢は、1930年代の伝説のブルースマン、ロバート・ジョンソン (イタルはロバートを敬愛していた!) が毒殺された年齢であり、ローリング・ストーンズのブライアン・ジョーンズが自宅プールで死亡しているのが発見された年齢であり、ジャニス・ジョプリンやジミ・ヘンドリックス、ドアーズのジム・モリソンが突如世を去った年齢と同じである。彼がロック界の最後の龍だったのかもしれない。

普蕭は嘆息し、言った。

「C、D、E、F、G。うん、わかった」

龍肯は諦め顔でハープを出しながら、

「きつと歌詞はまだないでしょうね」

「あたりまえだ。ここに来る前に思いついたばかりさ」

「そうだと思います」

4人はしばらく演奏した。龍肯は時々メモを取る。急ぐときはスマートフォンのボイスレコーダーに入れたが、再生が面倒臭いのであるべく手書きにしていた。タグやファイル名が音声で入力できればもう少し使ったかもしれない。

叭羅蜜斗がベースを置いた。

「意外にこんなシンプルなのもいいんだな。尖が<sup>とん</sup>ついていなきやロックじゃねえと思っただが、これはこれでワイルドだ」

「そう言うおまえの感覚は白亜紀、いや、カンブリア紀なみだな」

ベ裂が揶揄しても叭羅蜜斗は、

「ありがたいね。時代なんか糞喰らえだ。オレはいつでも戦国時代か、幕末よ。それよか、生ギターの音つてのは意外にハードなんだな。それでも一応ライト・ゲージか？」

「いや。」

久しぶりにミディウムにしてみた。ミュート気味に弾くから余計そう感じられるんだろうな」

「思い出したんだが、この前偶然 Miles Davis & John Coltrane (1958-1959) Live New York つてのを聴いたんだが、これがまた、ワイルドなんだ」

「おまえのワイルドは意味がわからん」

「何？ーのかなー、生々しいんだ。エコーもかかってない」

「ライブ録音なんだろう？ 昔の」

「ま、そりゃあーそうなんだが」

普薫が笑う、

「いいじゃないか、何となくわかったよ。もう1回やろう」

「構わねえさ」

ベ裂がそう言うのと、普薫がスティックでカウントを取る。

演奏が始まったも龍肯はハープを唇に当てなかった。小さな声で歌い始めた。

悪魔の降りる 四辻で Blues おいら今宵も horror する

Wolf のように horror する 涙び叫ぶ Tears Songs

Dancing Farmers 魔女の舞い

おれは Cool べ上機嫌 魂叫ぶ Heartbreak Blues

何があつても上機嫌 おいら Cool べ上機嫌

Blues に葬られ 魂裂ける Burning Heart

※

あゝ…………縛めを解かれたプロメテウス

※

そいそ おいら Bluesy

そいそ おいら Melancholy

そいそ おいらの Courtney

おれは独りや Lonely Boy

Miss you Miss you Miss you my love

※

あゝ…………縛めを解かれたプロメテウス

※

そらや おいら Bluesy

そらや おいら Melancholy

そらや 可愛 Courtney

いつかいつしよに暮らそうぜ Aha!

Miss you Miss you Miss your lips

Wooo! Yeah!

「取り敢えずいいんじゃないか。

やっていくうちに仕上がるさ。じゃ、タイトルは『Country Courtney』でいいな」

ベ裂はそう言って録音スイッチを止めた。

「『じゃ』って何が『じゃ』なんだかわかんねーぜ」

「そういふことさ。

さて、普薫」

「何？」

「あれはどうしたんだ？」

「ああ、インドラか…………」

「インドラ？」

叭羅蜜斗が怪訝な顔をする。龍肯には心当たりがあった。

「インドラ※って、未完成の」 ※インドラは古代インドの雷神。聖典リグ・ヴェーダなどに詠われる。

普薫が頷く。

「よく知ってるな。

そうだ。イタルが作ろうとした大曲で、未完成のままになっている。実は今回、こういつた未完の曲や、既に生前に完成していた曲のリメイクも含め、いくつか当時の曲を録音しようと思っているんだ。インドラはその1つだ。実はこれとラグナレク Ragnarok（神々の黄昏）が未完成曲の中で最も気になっていた曲で、タイトルさえ定まっていなかった。

とは言え、僕はイメージをはっきりイタルから聞いたことがあって、完全に仕上げるこ

とが可能だと思っている。いや、どうしても完成させたい。未来に在るべきイタルの魂が込められているような気がしてならないからだ。これが再結成の最大の目的なのかもしれない」

龍肯は自分でも不思議なくらい、唐突に憤りを覚えた。しかもそれが噴出し、

「それじゃ、過去に縋るようなものです。いま演る意味なんか何もないじゃないですか」

普薫が嘆息しつつも少し真顔になった。

「そうでもないさ。繰り返しも常に差異を生む。差異は時間の延びの中で引き伸ばされ、歪み、一瞬たりとも静止せず、形を変え続ける。諸行無常だ。形などない。過去も未来もすべては無以前だ。

一期一会のいましかない。『過去はもはや存在しない。未来は未だない』、有名な仏陀の言葉だ。物事は単純じゃない。それだけのことさ。以上」

ズレが龍肯の肩を叩いた。

「安心しろよ、歌詞はできてる」

龍肯は紙を受け取った。そこには『虹の稲妻 Rolling Thunder Rainbow』と書いてあった。それを歌う。

「インドラ That fight is ever existence and forever

インドラ It unlimited freedom and crazy speed

インドラ Heartless and cruel great beautiful God

インドラ It's slaughter, massacre, genocide

インドラ……

Rolling thunder rainbow Rolling thunder rainbow Rolling thunder rainbow

インドラ……」

龍肯は考え込んでしまった。

叭羅蜜斗が、

「どうした？」

龍肯はぼんやりとした眼で返事をする。

「なぜこの歌詞なんだろうなって…虹の稲妻」

「誰もイタルの考えたことなんてわかりはしないのさ」

「そうですね」

普薫が間に入る。眼差しが疲れている。

「あまり悩むな。イタルの創作 lyric はいつも、哲学的とも言えるし、無意味に知的なゲームのような韜晦性があるようにも見えるし、象徴的だったり、アイロニカルだったり、敢えてミーハー的だったりもする。時には呪術的で意味不明なことも珍しくない」

「そうですね。この歌は」

龍肯は言葉に詰まり、口をつぐんだ。ズレがギターを弾き始める。

「Talk is cheap だぜ」

叭羅蜜斗がベースを、普簫がドラムを。小雨を想わせる憂愁を帯びた静かなアルペジオから始まり、緊張を孕んで次第に高まり、雷霆を思わせるギターの轟き、やがて浪漫的、神話的で、雄渾壮大な大曲がうねり、大波の大海のように天穹に響き渡る……………

龍肯は道々考えた。家に向かっているのではなかった。目的はないが、薙久菰の町に行くために真神線の駅に向かっている。独りごと、

「何だろう、虹の稲妻って…」

スマートフォンを出し、検索してみる。虹の稲妻。虹と稲妻が同時に発生した画像とは出て来る。稀にこんなことがあるようだ。しかしイタルが歌おうとしたのは虹のような7色のグラデーションの稲妻である。Rainbow color の閃光のことだ。

「もちろん、あるはずもない」

そのとき龍肯の眼に留まったものがあった。

『驚異!! 凄い!! ペンライトのような光で暗闇でも発光する刺青 蛋白質由来の顔

料で体にもやさしい タトゥー・シヨップ雲龍うんりゅうもんじんすけ文仁丞 』

画像を見ると、確かに昔のネオンか、蛍光塗料か、海蛍のように、パステル・カラーのように色鮮やかに、柔らかい光を放っている。この特殊な顔料は一昨年から商品化されたらしい。元は某企業が開発したものであったが、研究開発に予算を注ぎ過ぎ、マーケティングやコンセプトに創意を注がず、経営が傾いたため、足下を見られ、商品が廉価で流出し、やがてタトゥー・シヨップでも使われるようになる。しかし龍肯が驚いたのはそこではなかった。龍図だ。

「これは」

まさしくイタルの顔に彫られた青龍と同じであった。鯨のように逆立つ青龍の図。生前、17歳のイタルは一時的に姿をくらまし、ある日、突然、顔面の左半分を覆い尽くすような

青き龍の刺青をして学校に現われ、皆を驚愕させた。担任の教師はどこで彫ったのか問い質そうとしたが、イタルは頑として口を割らず、親友にさえも教えなかった。

18歳未満の刺青は条例違反なので、ショップをかばったのかもしれないが、叭羅蜜斗に言わせると「奴は、そういう普通に筋の通った考え方をするタイプの人間じゃねえよ」ということらしい。

ネット上でもイタルがどこで刺青を彫ったかを探るサイトが立てられたりもしたが、さほど盛り上がりせず、そこそこで終わった。

それがここで偶然にも、ヴェールを脱いだのである。運命？ ふ。で、虹色の発光は、いったい、どこに……

あった。虹のようにグラデーションする蛍光色。

「しかしイタルがこれを知っていたはずがない。生きていた時代には、まだ製品化していなかった。もしあれば彼ならあの顔料を使って顔に彫らせていただろう」

Rainbow color に光る龍の刺青が夜の暗闇に鮮やかに泛び上がる場面を想像し、龍肯は恍惚とする。薙久襄駅で降りてぶらぶらと繁華街のある神中洲方面へ向かった。行く先はライブ・ハウス『Brown Sugar』だ。v v wは1度だけ、ライブ・ハウスのステージに立ったことがある。イタルはそこでも狂気を執行した。数千万円の機材を破壊し、莫大な賠償金を両親に負わせた。むろん、よいことではなく、道義的にも法的にも為すべきではない悪であり、真似る必要など一切ないとわかってはいても、龍肯は自分に問い質さずにはいられない。

自分に同じことができるだろうか、と。

むろん、できるはずもない。自分を信頼してくれる人を裏切り、傷つけ、無関係な人に大きな迷惑をかける。絶対やってはいけないことだ。龍肯は解答のない設問に無力で絶望的な焦燥を覚えた。

普肅はいくつかのパーカッションがならぶ位置に坐った。

「『豪奢なる修羅の戯』をリメイクしたいんだ」

そう言った。ベレが唸る。龍肯は彼らの顔を見比べた。叭羅蜜斗がぼかんとした表情で、「何でだ？」

咳払いしながら普肅は説明した、

「最後のライブでやった曲だ。Lyricに就いては、イタルも難渋していた。一応、完成した曲ではあるが、もう1度、自分らの解釈でやってみたいんだ」

龍肯が反対した。

「僕は。僕はユーチューブでしか見たことはありません。このスタジオで演奏していた動画でした。聖域です。神中洲の公園でやった最後のライブで演った曲として凄く有名です。ライブの映像そのものは残されていませんが…」

「イタルがそれを意志しなかった。オレたちは異論を唱えなかった。何となくわかったんだ。奴の考え、つて言うか、気持ちかな」

叭羅蜜斗が言葉を挟む。

「ええ、それは、僕にも、何となくわかります。何となく。それも鑑みて、やはり冒すべきではないと思うんです。第一、あの人の領域を超えたようなパフォーマンスは常人には無理です。動画に残さなかったのは、たとえばソクラテスが哲学を羊皮紙に書き記さなかった理由と同じだと、僕には思えます。何か説明にならないんだけど。しかし感覚には確かです」

ベ裂が蒼穹を眺めながら独り言のように語る。

「あの頃、ライブ・ハウス破壊事件で俺たちv wは演奏のできる場所がなかった。行き場を失っていた。だが、それが公園でのゲリラ・ライブの理由ではない。オーディエンスの有無を度外視したライブ、純粹芸術のようなライブ、それが狙いだった。そういう意味で記録に残すのをよしとしなかったんだ。まあ、こうやって言葉にしちまうと、それだけのことになっちゃうがな」

普肅は微笑んだ。少し痩せた焦燥を孕んだ微笑。

「わからないのか。だから演るんだ」

叭羅蜜斗が頷く。

「なるほどね。奴なら言いそうなセリフだ」

普肅はシンセサイザーにセッティングしてあった民族音楽的な管楽器の音を鳴らし、ディストーションをかけて大蛇のようにうねらせた。自動演奏にすると、録音スイッチを入れ、パーカッションを打ち始める。軽快なリズム。さまざまな打楽器を次々打つ。ベ裂はファズを利かせたギターを弾き始める。叭羅蜜斗もベースを肩に掛ける。コンガのように軽快なリズムで弾く。

龍肯はLyricを印刷した紙を探し、ようやく見つけてマイクの前に立つ。ファルセットがうまく使えない。イタルのように鬼気迫る邪教的な感じにならない。

『なるはずがないじゃないか』

その日は雨だった。

普蕭が入ると、メ裂が1人でギターを弾いていた。聴いたことのあるメロディだった。

「『Elegy』か」

そう呟くように言った。メ裂も爪弾くピックの動きを止めた。

「ああ、そうだ。時々すごく意味深く聴こえるんだ。この曲が」

We die. You go. Mellow mother...

普蕭は黙ってグラウンド・ピアノの前に坐った。

低音部で D・Gm・D・Gm・D・Em・F を強く叩き、少し間を置いてから静かな、切々と繰り返される F#m と C#m を弾く。これが基本的なリフだった。そして Cm7#・A7b・G7 へと奏で繋げ、またリフに戻る。

「こんな感じだったな」

「ああ、そうだな」

普蕭とメ裂は感慨に耽る。『Elegy』はイタルが作った曲の中で、録音まで行かなかった数多くの楽曲のうちの1つだった。

「出だしの部分は、何となくモーツアルトの『レクイエム』にインスパイアされたのだろうな。もともとは二つの曲だったものを一つにしたんだ。奇妙な違和感があるが、それが存在性を明晰判明にしている。結局、存在とはそういうものなんだろうな」

なぜか普蕭は嘆息を哀しげな微笑でそう締めくくるのであった。

「バンドじゃ無理だろうな」 メ裂がそう言うのと、普蕭は、「僕には…弦楽器が聴こえる。弦楽器奏者を呼ぼう。知り合いがいる」

普蕭はすぐに知り合いのバイオリニスト、ヴィオリスト、チェリストを呼んだ。弦楽4重奏を加えたのだ。もちろん2人のバイオリニストのうち1人は普蕭である。

叭羅蜜斗は出番がなくてふてくされていた。遅れて龍肯が入ってくる。

「ほらよ」

渡された紙切れを龍肯を見ると、lyric が書かれていた。

「これは」

「『Elegy』って曲だ。イタルが作った。完成はしていたが、録音も録画もされなかったか

らさすがにおまえも知らないだろう」

「なぜ記録に残さなかったんだろう。理由があるのでは」

「思うに、この場合は、時間がなかったからだろう。奴は意図的に記録を残さないこともあったが、これは違うと思う。何て言うかな、フィーリングでそう思うだけなんだが、間違っていない気がする。ま、チャンスがなかったものは仕方ない。諦めるしかないんだ。

あとは生き残った者で生き残った者のやりたいように料理するしかない、ってこったあ」  
「そうですね」

龍肯は憂鬱な顔で応える。暗い表情で4人の弦楽奏者が演奏するさまを見ながら、紙を見て小声で読んだ。どういう風に歌ったらいいのだろう。イタルはどういう考えだったのか。いや、叭羅蜜斗の言うとおりイタルがかたちに残せなかったのだから、自分なりにやるしかないのだと思うとしても、憂鬱が瀝青のようにこびりついて離れなかった。

これ読んだか？

「え？」

龍肯が振り返ると叭羅蜜斗だった。また遅刻だ。簡易宿泊部屋もあるのだから、いつそうレコーディング中は泊まればいいのに、と龍肯は思うのであった。しかし一向気にする風もなく叭羅蜜斗は、

「最近、この辺で話題の小説だ。『デビル・アスタロテ Devil Astarote』ってんだ。これで1曲作らないか」

「これは」

「あゝ、これはおまえの同級生だろ」

「そうです。天<sup>あまの</sup>之<sup>いさなこ</sup>です。天之韋<sup>あまの</sup>眞<sup>いさなこ</sup>子の書いた小説です」

悪魔族、世襲の大貴族、アスタロテの奇譚。人の世を皮肉り、嘲笑する。龍肯の脳裏に弦楽4重奏と絡む、タムタムや、ミューとしたトランペットの旋律などが想い浮かんだ。抒情と無機質、スノビズムや藝術至上主義、邪教的な陶酔、オリエンタリズムと中世ヨーロッパ、度を越した貴族的な睥睨、贅沢に慣れ親しんだ無慈悲、美への陶酔……

「トランペットなら、1人知っているよ」 普蕭がそう言った。「あした、都合が良ければ来てもらおう」

龍肯は旋律のイメージを普蕭に伝え、普蕭はそれを譜面に落とした。

「ふーん」

譜面を見ながら叭羅蜜斗が唸る。

「おい、おまえはわかんないだろ」

ベ裂が笑いながら肩を叩く。そして、「普薫、ギターはいらないのか」

「トランペットやストリングスと合わせてから考えよう」

ベ裂は肩を疎める。呼ばれて現われたトランペット奏者は太った大柄な男だった。黒縁の眼鏡をかけて強烈な高音を吹き続けた。

普薫は不機嫌な顔で、タムタムの前に坐り、「ミュートしてくれ、繊細に」と言った。

そのうち以前に呼んだ弦楽奏者も来た。この日はバイオリンも2人いて、4人だった。しばらくジャムるうちに、ベ裂がスパニッシュっぽいギターを入れた。叭羅蜜斗はどうしてよいかわからないようだった。龍肯は用意した歌詞を少しずつ歌い始める。歌いながら、アスタロテのイメージを追う。韋真子も立派な仕事をしている。「なのに僕は……………」

叭羅蜜斗が珍しくギターを抱えて坐っていた。ベ裂は尋ねる、

「お？ 何してんだ？」

「作曲さ。オレだつて1曲ぐらいはな」

「へー。ムリすんな。どんな感じだ」

「『この大地に永遠の平和を』みたいなやつをな」

イタルが作った唯一、人道的な平和の歌である。

「おまえがか!?! まあ、ある意味、破壊的な、パンキッシュだが…………アヴァンギャルド的なっていうのか」

「うるせえーや」

「もしかしてこれがタイトルか？」

ベ裂がノートを取り上げた。「って言うか、おまえがノートを使うとはな。パンクも終わりだな」

Αλλά όποιος σε χτυπήσει στο δεξιό μάγουλο, σπάει το και το άλλο...

そう書いてあった。

「ギリシア語か。何て書いてあるんだ？」

「ちえ、別に……。かんけーねーだろ」

「読み込み方式の翻訳アプリを使えば、すぐわかつちまうさ」　そう言って、ズレはスマートフォンを出して翳す。途端に目を丸くし、大袈裟に「ああ。世も末だな」と肩を竦めた。

マタイによる福音書　5章39節

『しかし、わたしは言っておく。悪人に手回かつてはならない。

だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも回すな。』

インドラ・セツションを数回した後、普薫が言った。表情は熱があるように虚ろだった。

「実はイタルが構想して未完成な曲がもう1つある」

「この前も聞きましたよ、ラグナレクでしょう」

「そうだ」

『湖上の城 Ragnarok』……

イタルが書いた小説だ。

インキュバス Incubus (夢魔) に犯された人間の女性が生んだ悪魔の子。白い髪を持ち、不思議な能力を持つて生まれた異常児。彼は両親から愛されなかった。その異常な能力により自分の意志に関わらず、父母を殺してしまう。自分が生き残るために、本能的に能力が発動してしまったのだ。以来、彼の心は氷となる……そういう話だった。

いかにも、なストーリーだが、イタルというブランドが附くと、生半可なことには思えなくなる。龍肯はまたもや悩んだ。さまざまな深読み、哲学、思い込みが怨霊のように魂に付き纏う。多くの妄想が髣髴する。我々の健全な状態での意識は意識のほんの一部分に過ぎない。薄い壁を隔てて、知られざる無制限な、奥深い、捉え難い潜在意識の巨大な海がある。恐るべき無限、その広大さ。トリップしたときに観る幻想のように、胸に抱くイメージがあまりに超常的過ぎて、どうにもならない。聴く者にその世界観をバイブレーションできるだろうか。「できません。不可能だ」

彼は両手で頭をつかんだ。

「そんなに悩むな」

ズレが肩に手を置く。叭羅蜜斗も、

「いままで作ったおまえの lyric は悪くないし、今日まで歌ってきた歌も上々だぜ。自信を持ちな。堂々としていいぜ」

普薫が苛立たしげに、しかし吹っ切ろうとするかのようにスティックでカウントを取る。

「さあ、演ろう。それが一番だ。うまくいくかどうかはいま心配するな。どっちにしろ、いずれ時がすべてを解決する」

彼は彼で焦燥感を覚えていた。それが何であるかは彼以外にはわからなかった。

龍肯は嘆息する。考えれば考えるほど不可能であった。『インドラ』や『Elegy』もそうだが、イタルがこれを書いた録音や動画は一切ない。だが龍肯にはその光景が呪詛のようにまざまざと泛ぶ。泛ぶけれどもたどり着けない。憑かれたような焦燥を覚える。

夜、練習を終えても龍肯は独り、ライトを消してスタジオに残った。棚を開けて上物のバーボンを呷る。樽出しで加水されておらず、60度以上ある。イタルが幻影のように彼の臉に泛んでいた。いつの間にかあの刺青が脳神経細胞のネットワークを繰り返し繰り返し廻り、ループしていた。燐光するあの刺青を入らたらどうなるだろう。たとえばイタルの青い龍神の刺青のように、顔に彫ったらどうなるか。夜にはぼうつと光るのだ。街中は歩けまい。狂気だ。狂気？ むろんそうだ。それによって一生が台無しにされてしまうのだ。家族を悲しませるのだ。ただ自分の気違いじみた満足のために……だから、いいんじゃないのか？

「ふふ」

おかしさがこみ上げた。たまらなくおかしかった。

イタルの作った曲の中で、最も重要で、謎の多い曲が『エクスターゼ Ekstase』と『kOO（くう）』だ。普蕭は『エクスターゼ Ekstase』をスタジオで歌うイタルを見た記憶があると言う。しかしそれだけである。その目撃情報以外、一切情報がなく、他の誰にも存在の知られていない曲であった。

さらに『kOO』にいたっては、イタルの存命中には誰にも知られていない。

この2曲が発見されたのは偶然であった。イタルが死んで数日後、普蕭はイタルが登録していたソーシャル・ユーティリティ・サイトに書かれていた彼のプロフをインターネット上で見ていて、ふと気が附いた。アカウントらしいものが記してある。そこは近親者しか閲覧のできない場所だが、彼は近親者扱いだったので、見る事ができた。しかしいままでは特に見る必要がなかったので、気が附かなかったのである。

「何のアカウントだろう？」

スマートフォンをポケットから出し、検索をかけてみた。すぐに有名な某短文を投稿でき

る情報サービスのサイトがヒットする。

「知らなかった。イタルが、このSNS (Social Network Service の略) のユーザーだったとは……」

書き込んでいる内容は大したことなかった。イタルらしくはあったが。普蕭は何となく先ほどのこともあって、それでもイタルのプロフィールが記載されている部分を見るとURLが記載されている。

「何だろう、これは」

リンクが貼られているようなので、早速クリックし、リンクを開くと、

「ブログだ。あのURLはブログのアドレスだったのか。あいつ、ブログなんてやっていったんだ……」

ブログを閲覧する。内容は意外にも平凡だったが、そこにもまた、リンクが貼ってあった（ここにおいてもURLがそのまま記載され、そこにリンクが形成されていた。イタルの性格がわかる）。それをクリックすると、

「ホームページだ！ イタル、おまえ、ホームページなんか作ってたんだ。ああ、別に珍しい事じゃないが、まさかおまえがね……」

なぜかわからないけれど、涙があふれてきた。彼岸に逝った旧友に再会したような気分だった。しかし、

「これは」

普蕭は驚愕した。そこには某動画サイトのURLが貼っており、クリックするとイタルがアップロードしたと思われる、静止画を背景にした楽曲の録音があったのだ。

「これは……知らなかった。しかし聴いたことがある」

それが『エクスターゼ』であった。長く引きずるようなバイオリンのような音から始まる。茜を帯びて濃い蜜色のような深い黄昏の、長く伸びて濃い翳りのようであった。それは緊張を孕み、気怠く、底知れぬ静けさ、異様であった。

やがて重たくゆっくり、鬱々とした、烈しいサウンドが始まり、やがて加速してデスマタルとなり、遂にそれは脅威的な（そう、驚異的と言うより脅威的と言う方がより近い）スピードの上げ方をして劇的に盛り上がって超越的な高みを目指し、段を重ねるように高潮して緊張と昂奮の絶頂に終にブレイクし、天上的にスローな、限りなく広がりのある、高みから見渡すような恍惚の、脱自的な音楽となる。なお、歌詞については断片的にしか聴取判別できず、また文字による記録がないので、ここに紹介できるような決定版はない。

「凄い。なぜ僕らに教えなかったのか。いや、それよりも、いったい、この演奏はどうやって作ったのか。こんな曲があることを、バンドのメンバーは誰も知らないはずだ」

それは未だにはつきりしないことであるが、シンセサイザーやシーケンサーを使ってデジタル的に作ったとしか考えられない。イタルはギターだけは弾けたが、それですらさほどうまくないからである。

さらに問題作は『kOO』である。

まずこのタイトルで複数の曲のアップデートがあった。歌詞は似ているようであったが、曲の長さや演奏は全く異なっている。長いものは90分以上に及ぶ大敷衍、大長広舌なものもあれば、数秒のものもある。曲も、ハーモニカのみ、またはギター一本のカントリー・ブルース、鼓一つで詩吟のように詠ったシンブルなものから、数百か数千種類の録音（街の騒音や自然の雨・この葉のそよぎ・流水・霹靂の音、重機や工作機などの機械音、重砲音、シンセサイザーなどで作ったような電子音、さらにそれらの逆回転音、またそれらを電氣的に加工した音）で構成されたコラージュのようなサウンド、または民族楽器を数十種類録音して重ねたような音で構成される抽象的な音楽など、さまざまであった。

音の大氾濫の中に、イタルと普蕭がまだ小学生だった頃、二人で作った短い曲の演奏が聴こえたような気がした。しかしそんなことはあり得ない。録音した覚えがなかった。幻聴に違いない。

「いずれにせよ、こんな曲があるなんて、全く知らなかった。それにしても、いつ。短い時間では作れなかったはずだ、こんな凄い多重録音を」

ベ裂や叭羅蜜斗にも聴かせたが、やはり知らないと言う。

「凄えな、音の洪水だ。この宇宙にある森羅万象を録音に実在させようとしているみたいだぜ」

叭羅蜜斗が唸った。ベ裂もまた、

「そういう意味では、この数秒の Blues Harp（ハーモニカ）の演奏も深玄に聴こえる」

「音楽と言うよりは」 普蕭が結語した。「哲学だな……」

この2年後に、作品からインスパイアされた天易真兮が『実存的分析による存在論考「空」』を書いたことにより、今日では「kOO」という語が「空」を表わしているというのが定説である。

今回、再結成でいくつかの曲のリメイクや、未完成曲を完成させようとするにあたって、当初、この2曲（『Ekstase』と『kOO』）を是非とも演ろうと普蕭は主張した。むしろ

これのための再結成と言わんばかりのロジックだった。しかし、「こいつは神聖不可侵だぜ。実際、人間の領域じゃない。何かを一足飛びに翔び超えて逝っちまってるぜ。彼岸だ。無住処無余涅槃って言うべきなんだろうな」という叭羅蜜斗の一言に、ベ裂も深く頷き、龍肯は云々することができず、話は終わった。

龍肯は『インドラ』の歌詞の改変を試みた。聖域への挑戦であったが、誰も異議を唱えなかった。

「イタルは面白がるぜ」 叭羅蜜斗がそう言ったただけだ。改変は歌詞ばかりではない。

普肅とベ裂はDAW (Digital Audio Workstation) を使い、この曲を、演奏するというよりは再生すると言った方が正確な表現になるような、そんな曲へと変えていった。

「もう1度やりましょう」

そう言う龍肯を普肅が制す。

「いや。今日はもうここまでにしよう。これ以上、演っても惰性になるだけだ。感覚がダメになっている。少しブレイクしよう」

しかし爛々とした双眸で龍肯は断った。

「いやです。もう1回だけ歌わせてください」

「腐って狭く小さくなるぜ。イタルがよく言ってた」

叭羅蜜斗もそう言う。しかし龍肯は、「しかし。でも……」

ベ裂がギターを置いた。「勝手にしな。独りでな」

そう言って簡易宿泊室に引き上げた。叭羅蜜斗も欠伸をしてそれに続いた。

「独りで十分です」

「無理するなよ。今日はずっと演ってるんだぜ。もう午前2時過ぎだ。限界は既に遙かに超えている」

そう言って普肅も引き上げる。彼はいつになく疲れたような、熱に浮かされたような顔をしていた。何かに悪しき怨霊に憑かれているかのようなのであった。

龍肯はスタジオの照明をかなり落とした。DAWで再生し、ヘッドホンを被って、マイクに向かい、呪詛のように歌った。歌い、叫んだ。叫び歌う。何度も何度も叫んだ。狂おしく声を裂く。少しでも早く徹底的に大きく我が身を裂こうと焦燥する者のよう、性急にマシンガンのように狂ったように絶叫した。激しく烈しく絶叫した。狂叫した。狂裂し、

天翔け躍り狂った。気が附くと眞神山の麓に来ていた。

天平郷から数kmあるはずだ。どうしてここまで……………

月光に、真っ黒に聳える長方形の山だった。エンパイヤーステイト・ビルにも喩えられる。そこは、その山頂は、眞神古来の聖域であり、イタルが焼身自殺した場所だった。偉容が怖ろしく龍肯に迫る。劇しい、根底から人間存在を揺るがす恐怖に襲われた。龍肯は絶叫し、走って逃げた。闇雲に、夢のように、どこをどう走っているのかも考えられず、逃げた。

『Get Free』を数回練習した後、龍肯が言った。その顔は憔悴し切っている。

「あの」

「何？ それよりか、体調悪そうだが、大丈夫か？」

普肅がスティックを置き、そう問うた。

「いいえ。大丈夫です。ええ、きつと。いや、大丈夫ですが、あの。何て言うか。その。

『Rock'n Roll Love Letter』をやつてはぶっかな……………って思つて」

「『Rock'n roll love letter』をー」 そう言つて、普裂が眉を上げる。

「何でだ？」 ベースを爪弾きながら叭羅蜜斗も問う。

「そういう気分なんです」

龍肯はただそう答えた。普裂は肩を竦める。普肅も最近眉根の皺が消えないその顔に疲労の表情を泛べ、「しかし…」

叭羅蜜斗も口を開きかけたが、普裂が突如その曲のリフを弾き始める。皆何となく演奏し始める。

『Rock'n Roll Love Letter』の歌詞は古いアイドル・グループの歌う歌の歌詞のようであった。それは自分の感覚に最も異逆するものを歌おうとするイタルらしい自裂自虐の歌だ。

「ぼくはあの子を好きなのさ ぼくはこんなに好きなんだ／あの子のことしか考えない  
考えられないあの子しか／だけどぼくの片想い ぼくが彼女を好きなかだけ／伝えられない  
この想い ぼくには伝えられやしない／ロックン・ロールつきやでやしない ロック  
ン・ロールしかできない／ロックン・ロールだけできる ロックン・ロールができるだ  
け／Rock・n roll Rock・n roll Rock・n roll Rock・n roll／ロックン・  
ロールがラブレター ロックン・ロールがラブレター／Rock・n roll is love letter!

Yeeeah!」

ベ裂はチャック・ベリー風にギターを弾いた。2、3回演奏してから言った。

「いいかもな。こいつも入れてみようぜ。Rock n rollだ」

龍肯は『デビル・アスタロテ』のヴォーカルの録音のときにはスタジオで独りになりた  
いと言った。

「照明を落としてほしい。そしてスポットライトで照らせばそれなりに絵になるかもしれない。ともかくやらせてください」

普蕭は反対したが、ベ裂が「いいじゃないか、それで行く」と言うのと抵抗しなかった。

龍肯はヘッドホンを付け、暗いスタジオに独り、マイクの前に立った。

他のメンバーはミキシングルームでコンソールの上にあるモニター越しにその様子を見る。イントロが始まった。バイオリンの音を深い黄昏のように不気味に長く引き伸ばし、  
気怠い歎きをつやめかす。奇妙な緊張感。やがて悪夢のような金管楽器のミュート音が始  
まる。龍肯は最初、囁くように、やがて呟くように、そして呪詛のように歌う。贅沢に馴  
染んだ冷血非情な悪魔の大貴族、常に冷やかで、人間を睥睨する超越的存在者ならではの  
独特の眼差し。

龍肯の表情は青白い悪魔そのものであった。高みから冷厳と人間を見下ろすその双眸は  
偉容ある山嶺のように、高き雲のように、ひろがり渉る海のように、蒼穹のように神々し  
い超越的な無表情を湛えている。愛も正義も、人間の価値観のすべてを、平然と無みして。  
恐るべき高みから睥睨している。

氷のようなシンセサイザーの音。

それが雲の切れ間から差すレンブラント光線のように空間を照らす。なぜか李白の『静  
夜思』を髣髴とさせる。「牀前看月光 疑是地上霜 舉頭望山月 低頭思故鄉」……

普蕭は無表情で淡々とシンセを弾いた。キーボードの上を規則正しく指が舞う。それは  
湖面だった。さざ波すら立たない湖面。ガラスのような、サファイアのような湖面。

そこは異様な場所であった。湖の周囲は岩の絶壁によって環状に囲まれている。死火山  
の上のカルデラ湖。かつては噴火口であったため、さような荒涼たる光景なのであった。

水深は深い。巨龍が住んでも見つからないほど深い。その中心に奇岩の島があった。

岩の上には尖塔を持つ城が建っている。非常に鋭利で、全体が天を貫く剣のような白い城。湖上城。それが城の名だ。

城の主はラグナレク伯爵。辺境伯。夢魔と人間との間に生まれた。父伯爵は彼を憎み、母の胎内から出ると同時に殺そうと、剣を構えて出産の部屋に立った。しかし魔人の冷酷な本能により明確な意識もない嬰兒は念の力で父を引き裂いた。母は絶叫し、絶望して気を喪った。

数年後、彼は孤独であった。召使たちは次々辞めていく。誰も語りかけない。母以外は。母だけが彼の愛のすべてであった。しかし次々と起こる奇怪な事件。領民の心は激しく動揺し、遂に聖職者が動く。母に聖なる剣が渡された。気も狂わんばかりに苦しんだ末、母は終に決心し、幼きラグナレクの部屋へ赴く。

ラグナレクはそれを察知していた。愛する母のために死を決意した。しかし悪魔の本能は彼の意志に関わらず動きした。攻撃者を殺そうとした。ラグナレクは叫んだ、「やめて、お母さんを殺さないで！ やめて、お母さん、お母さん」

獣のような絶叫とともに女はいくつかの肉塊になった。恐るべき惨死。ラグナレクは崩壊し、魂を喪った。彼の心は冷厳な氷となり、二度と溶けることがない。

タトウ・シヨップ『雲龍文仁丞』うんりゅうもんじんすけは神中洲にあった。龍肯に迷いはなかった。

「どのくらいかかりますか」

「金か、それとも時間か」

昏い黄昏と蠟燭の灯の中、頬に蚩尤しゅうのタトウを入れたモヒカン頭の若者がぬめりと振り返ってそう言う。まつ毛が長く、鬚と繊細そうな顔立ちが合わなかった。腕にも和彫りが盛られている。

「時間です。あまり空けられないんです」

男はふふつと鼻先でせせら笑った。「で、どんな絵を彫りたいんだ？」「あれです」

龍肯は店に飾ってあった見本を指さした。店内で燐光する、濡れたような青龍逆立ち図。

「ああ、いいよ。心配するな。早いぜ。昔と違うからな。今日1日で仕上げてやるぜ」



「つて、おまえ」

叭羅蜜斗の呆れ顔。龍背の影響か、普蕭も吹っ切れた感じであった。ベ裂が口を挟む。

「ま、それはいいとして、どんな曲にするつもりなんだ。同じコンセプトじゃ意味ないぜ。問題はそれさ。御託はいくらでも物の足しにならない。人は作品の出来を見て考える。判断する。考えがよくても作品として一つの世界を構築して、人の魂を惹く何かがなくては意味がない。立派な存在ではない。プレゼンス Presence たり得ない」

普蕭が物思わしげな顔になった。

「そうだね。それに、まだ譜面にしてないんだ。イメージは強いが、黎明みたいなもので、いや、どっちかつて言うって夜明け前の白み始めた空みたいなもので、整理されていないし、何と言うか、整理してしまったら、インスピレーションの源にあったものが死んでしまうような気がして」

叭羅蜜斗が笑う、

「何言っているんだか、よくわかんないけど、取り敢えず譜面がないのは問題ないんじゃないか？ どっちみちさ、おまえ以外、譜面読めないじゃん」

しかし、それを無視して普蕭は、

「全体イメージは、ニーチェが言った『深淵』だ」

「わかんねえよ」

そう言う叭羅蜜斗を気に留めず、普蕭は続け、

「最初はパーカッションで始めたい。音楽の原点に帰るような、原始的のものでやりたいんだ」

「ふむ」

ベ裂がアフリカ太鼓の前に坐って返事をする。

「いや。何と言うかな。本当にファンキーな感じで」

ファンキーとは『原始的な』という意味である。イメージで言うって、祭などで火を囲んで輪になって声を上げて太鼓のリズムに合わせて踊るような……原初的 Primitive な狂騒秘祭（オルギア *orgia*）のイメージだ。顎を撫でながらベ裂が、

「ふうむ。じゃあ、まあ、たとえば、マンモスの頭蓋骨を太鼓にしてマンモスの肋骨を撥に叩くような感じだな」

「そうなんだけど、ちょっと、それは無理だね。アフリカン・ドラミングで何とか。実は既にネットで発注しておいたんでもう届いているんだ。ベ裂、いま君が坐ったところにあ

るそれがそうさ。それ」

「ああ、これか」

そう言いながら軽く叩く。

「うん、いいね。古い血が騒ぐ。根源的なね。まさにファンキーだ」

「なるほど、で、パーカッションистの寛太嘉は呼ばないのか？」

「今回は僕らだけで、コアにやりたい」

「コアなv v wか。もともとコアだぜ、オレらは。じゃ、その先は？ どう考えてんだ？」

叭羅蜜斗がそう訊く。普蕭が眉を顰め、

「うん。それなんだが。少しずつ緊張感を孕んだ異様な音が高まり始めるんだ」

叭羅蜜斗が眉を上げる。

「何だ、音楽的じゃないな。おまえらしくないぜ。抽象的過ぎてわかんねえよ」

ベ裂が、

「シンセとかを使ってデジタルに作れば、いいんじゃないか。低いところから緩やかに高くそして広がる、みたいな。残響音を残しつつな。また、その逆もありだと思う。何となく俺にはキング・クリムゾン King Crimson の『Larks' Tongues In Aspic, Part One (Part 1)』の導入部分の、バイオリンが緊張感を孕んで高まりつつある中、巨大な唸りのような、あの迫る旋律が聴こえてくるような……そんな感じを受ける」

普蕭は咳払いし、

「ま、僕はレッド・ツェッペリン Led Zeppelin の『Dazed and Confused』をイメージしたんだけど」

取り敢えずベ裂と普蕭が太鼓を叩く。それを録音する。叭羅蜜斗は風琴（アコードオン）を敢えてオープンリールに録音してアナログな逆回転を作った。ダビングする。普蕭は次に言った。

「弦楽器で不気味な音を作りたい。低音でね。チェロなどの低音弦をユニゾンで弾く。ウッド・ベースやエレキ・ベースもいいね。弓を使って。不気味な感じは出ると思う」

「じゃ、まずデジタルで作ってみよう」

普蕭は早速パソコンに向かい、チェロの音を払んで重ねてみた。

「じゃ、実際にやってみよう」

普蕭は弦楽器を吟味し、その日はベネチアで作られたチェロを弾き録音した。もう一度弾き録音する。これを八回繰り返し、その録音すべてをダビングして一つに重ねた。独特

な厚みと異様さが醸し出される。ベースやバイオリンでも同じように試みた。

「ここから何かを孕みつつ底知れなくて、凄まじく巨大なものが大地を孕ませるように膨らんで空恐ろしいほど大きく、途方もなく大きく、大きく大きくなっていくんだ。その緊張の頂点で、音の氾濫が爆裂する」

さまざまな楽器を持ち込んで録音した。弦楽器や打楽器のみならず、アジア的な金属打楽器や北アフリカの（モロッコとか）金管楽器や、エキゾチックな弦楽器などを装飾的に絡める。

「その電子スクラッチ盤を使って、ちょっとノイズっぽく入れてみないか」

そう言ったのは叭羅蜜斗だった。

「もつとだ。もつとだよ、叭羅蜜斗。イタルの『kOO』を考えてみるんだ。あの凄まじい音の氾濫、怒涛、大洪水だ。もつとたくさん音を入れたい。ノイズも旋律も、自然の音も年の喧騒も。すべてをだ、叭羅蜜斗。そうさ、次はありとあらゆる音を入れたいんだ。すべての存在者を。世界の再構築だ。全世界を包括するような音の大洪水を作りたいんだ。そうだ、同じじゃ意味がない。発展型でなくては」

「どうすんだよ」

叭羅蜜斗が問うも、

「片っ端から集めりゃいいのさ」

龍肯が言う、

「確か……。『空』をアプリ化するときにはたくさんの音を集めていませんでしたか」

「ああ。そう言えばやったな」

、裂がそう言っただけ。しかし普羅は、

「それを使ってもいいが、そればかりでは。これは芸術だ。効率よく仕事をこなせばよいというものじゃない。それからもう一つ」

「何だよ」

叭羅蜜斗は既にうんざりした顔だ。

「宇宙的な沈黙の深淵を作りたいんだ。君らはそもそも宇宙の大きさを、リアルに考えたことがあるか」

「ねえよ」

叭羅蜜斗が即座に答え、

「いや、俺は考えたが、想像も及ばない」

「そうや。」

君らは海が広くて偉大だと思っているかもしれない。ヒマラヤ山脈は広大で高く聳え、荘厳で雄大だとも思つかもしれない。蒼穹は壮大だとも思つかもしれない。

だが地球全体に比べたら山脈など微妙な起伏でしかない。

しかし太陽はこの地球の百倍だ。太陽から吹き上げる炎の柱は地球の数倍の大きさがあ  
るんだ。だが太陽も宇宙の中では平均的な大きさの星だ。

考えても見なよ。光はこの地球を1秒で七周半する。しかし、その光でさえ、あの星に  
到達するには、数千年、数万年、数千万年、数億年もかかるんだ。その広さを想い描ける  
か、無理だろう。

いったい、数億年という時間の長さを思い泛べられるか。平安時代さえ遙か遠い昔、千  
年すら途方もなく長いというのに。数億年なんて！ しかも一秒で地球を七周半する速さ  
の光が、数億年！ 途方もなさ過ぎる。

だが、僕はその巨大な、無制限な、凄絶な、上下左右もない、驚嘆すべき闇のみの深淵  
を、音楽で表現したいんだ。そして世界の一切の存在が置かれた場であるこの大宇宙を音  
楽で実現したい。

そしてすべてを網羅したい。この曲に一切を存在させたい。全体を作りたい。

全体として観れば、宇宙の物事はすべて複雑系的に関連していて、一つの事象の原因は  
必ず複数あり、その影響も存在の意味も多岐に及んで複雑だ。

だから、実際には、事象と事象の境目は曖昧なものだ。一つの物事を『これこれこうい  
う物だ』と一言で断ずることは百%間違いとなる

「で。」

「一つの音色や物音がいくつもの他の音と繋がって、無数の霞のような玉虫色の様相を見  
せるサウンド効果を作りたい」

「どうやって」

「まだ考えていない」

「どっちにしろ、デジタルな処理になるだろうさ。やはり他の連中を呼ぶべきだろう。コ  
アに作りたいって言う、おまえの気持ちにはわからなくはないが」

「ああ」

「おい、何かまだ考えてるようだな。これ以上、どうしようってんだ、普蕭よ」

そう言って眉を上げる叭羅蜜斗に一瞥を投げて普蕭は、

「宇宙空間には上下も左右もない。音でそれを作りたいんだ」

「それこそ、どうやって？だぜ」

「考えるさ。心配ない。独りでやらせてくれ。自分が感じていることを人と共有するのは到底不可能に思えるんだ。だから。僕がやる。独りで。そうさせてくれ」

結局、数週間をかけ、徹夜に近い作業で、他の曲の録音と並行しながら、普肅がほぼ独りで仕上げた。龍肯が何度か手伝ったが、それはほんのわずかで、機械的作業に限られた。「できたよ、その部分はね。そこだけだが」

眼窩は落ち窪みどす黒い。頬はこけて眼だけがギラギラした普肅。髪は乱れている。双眸は無然として魂がない者のようだった。「じゃあ、聴かせてもらおうか」

作品を三人が視聴する。眼前に広がる無限の空漠、真の空漠、無際限な自由、最も巨魁で、一切を凌駕する超越的な。：龍肯にはブッダの言葉が泛んでいた。「私は恐るべき荒野にいた。執著を捨てなければ誰も生きていけないような恐るべき荒野に」

いったい、どうやってこんな悪魔的なサウンドを作り上げたのだろう。

龍肯は幻惑を覚えた。奇妙な感覚というよりは凄絶な不安、いや、恐怖であった。根底的な、理性的、理論的な部分ばかりではなく、本能的な部分においても、価値観が崩壊してしまう感じ。嘔吐してしまいそうな平衡感覚の狂い。気が狂いそうな空間的時間的な歪みの感覚。足場のない空中に放られ、まさしく上下左右前後内外のない、身も歪み裂かれる感覚。途轍もない広大な空間に投げ出された、過剰な、無際限に自由な、どうしようもない怖ろしい殺戮的感覚。時間が既に死に絶えて沈黙の絶叫をしている世界。

星のない、百三十七億光年の宇宙。しかしそれはまさに世界そのものであった。氾濫する原子核と電子と反物質の世界、繁縷する精緻乱脈複雑大量の存在世界。龍肯は恐るべき不安に襲われたまま、音楽が終わっても抜け出せなかった。存在の不安を、感受性の根底から感じてしまったのだ。

「これで満足か？」

叭羅蜜斗が皮肉な笑みで唇を歪めた。しかし普肅は暗鬱な表情を泛べ、

「いや」

「僕は存在を解明したい」

「存在の解明？」

「むしろ理屈や概念では虚しい。ただ同義反復するだけに過ぎなくなってしまうからね。論理的な説明とは何か？ 君はわかるか。それはつまりAということを説明するのにBに

言い換えて、その差異を埋めることによって『納得』と呼ばれる心的状態（心情）を作り上げていくに過ぎない。ある意味で捏造だ。作りものだ。造られたもの、そういう風に造られたもの、意図的に、思惟的に造られたものだ。信じるに足りない」

その言葉は龍肯の魂に響いた。彼が生来持つている感覚に近かった。

「でもどうやって、本当にそれは」

「そうだぜ。むちゃくちゃだぜ。出来っこねえ。空想にも描けないぜ。イメージがあるのか」

叭羅蜜斗が肩を竦めてそう訊く。

「それは」

普肅は唇を舐めつつ、慎重に言葉を選んだ。

「時間と空間はビッグバンから生まれた。ある物理学者によれば宇宙が始める前には無すらもなかったと言う。存在も、非存在も、ビッグバンから生まれた。あたかも物質と反物質が生まれたように」

叭羅蜜斗が呆けた顔で訊く、

「無と非存在はイコールなのか。反物質は違うと思うが…」

普肅が困った表情で、

「いやあ、僕にもよくわからない。確かに違うような気がする。ただ、存在の解明とは、極限のリアルを追求することではないと思うんだ。究極のヴィヴィッドさ、鮮烈さ、生々しさ、あざやかさ、迫真性、現実感……」

言わば真実の極限だ、真の極みだ、そういったものを……」

龍肯が突然さえぎるように言い切った。

「不可能です」

しかし普肅は、

「不可能な Mission で自己を超越したいのさ。自分を裂く、自分で自分の頭を踏んで高みに迫る……それがイタルの残したモードなんだ」

龍肯は、

「だが、真実とは何ですか」

「うむ」

「正義は真実でしょうか、愛は真実でしょうか、空腹は真実でしょうか」

「すべて言ってみてくれ」

「いみじくもあなたが言ったように、心的状態に過ぎない。

考えてもみてください。ニューロンからニューロンを渉るインパルスなんです。無味乾燥無色透明で無特性無性格です。

我々は胃の壁がしくしくするから、脳が空腹であると分析して空腹感があると思ってる。しかしそれは違います。鼻之壁の刺激は無性格で無特性です。それが刺激であつてもです。これはこの考え方に慣れないとわかりにくいかもしれません。逆に言えば人間の理解とか思考なんてそんなものなのです。要は擦り合わせて馴染ませて納得という心情を捏造している感覚の傀儡なのです。刺激は電氣的な信号でしかありません。その波長に物理的な差異があつても、それが差異であることを脳が作るのです。我々は客觀的に差異が存在していると思つていますが、そうではありません。現象は起こつていないのです。脳が着色するから『起こる』のです。物理的な差異があつたとしても、その差異は脳が色別を与えるまでは、何ら特性を有していないのです。差異ではないのです。ましてや意味ではありません。

すべては脳内にア・プリオリに用意された計画的枠（スキーム Scheme）に随つて既に決まつた形に構築された色彩の差異 *différance* なのです。もしくは差延 *différance* です。

我々は実体的な同一性を理解説明するときにAはAである、と言います。このとき当然、A||Aなのですが、形式的には主語のAと述語のAは別物として措かれて、その上で特定の性質（同一性）を理解させる仕組みになっています。つまり一切の理解説明は次々差延を生んで永遠に続くループなのです。絡繰りです。存在の解明はあり得ない」

普蕭は笑い、

「そんな話はわかり切つたことだ。だから未遂不収つて言葉があるんだ。そうさ、結局、できませんでした、つてことさ。結論が得られない。中途挫折さ。

だから人は堂々と果敢に行動すべきなんだ。僕はそれを音楽というアクションで行いたいんだ。だから、この曲の最後は、この渾沌を打破すべく超絶の速弾きを入れたい」

ベ裂が笑う、

「そりゃ、かつてイデーで光速のギタリストだったおまえにしかできないな」

イデーンというのは高校時代（二年生）に普蕭がやっていたバンドだった。彼はここで満足できなくて脱退し、イタルと組んだのであった。

「出来るところから先に作るか」

叭羅蜜斗がそうばやいた。普蕭はディストーションやワウワウをかけたギターでいくつ

かのテイクを録り、一部周波数を弄ってから14テイクをダビングした。ドラムもベースも自分で弾いて、数十テイクを作り、十数テイクを一つに重ねた。

だが結局、存在の解明は完成せず、『Daze』のアイディアは没になった。

最初はゆっくりとした静かなバイオリンの音。

やがて緊張を孕んだピアノが始まると、雨の効果音が次第に音を高める。霹靂。雷の間隔が短くなり、豪雨。湖面のような神秘的なシンセサイザーの音が徐々に上がっていく。やがて天空を満たす。凄まじい落雷、床が揺れるほどの打撃的な重低音。樹木を裂くバリバリというサウンド。龍肯が叫ぶ、

「殷贅羅<sup>ズ</sup> (インドフ) !! That fight is ever existence and forever!!」

形相は凄惨、蒼白で双眸が睜かれ、<sup>テディウム</sup>「It unlimited freedom and crazy speeded!!!」

そして讃美歌のようなコーラスが、

*Rolling thunder rainbow Rolling thunder rainbow Rolling thunder rainbow*

それは増幅され、限界を超え、自らの頭を踏んで自分自身を乗り越える。すなわち自己を超越した。あたかも天空のすべてに満ち、成層圏を超えて高鳴る鐘楼の鐘のように。天穹に鳴り響いた。太陽系を超え、銀河を超え、銀河団を超え、大銀河団も超え、超大銀河団を、宇宙を超えて響く。宇宙を超えた大聖堂が現前するかのようなであった。意味や意義というものなど死に絶えてしまいう超絶の世界。言葉など形骸でしかない世界。真の、事実の、現実の世界。

無数のもの、無数の存在、生きとし生けるもの、それぞれの意識、存在のさまざま無限なる繁縷、捉え難い、自由自在無碍の炸裂する奔放、天なる無法、すべて何もかもということ、あらゆるもの、どうあっても構わない、無際限の自由、ただの現実。ありふれた李王朝の日常雑器であった茶碗。露地の躊躇。濡れた路傍の石のつや。笹を打つ五月雨。竹の篋。

「大霹靂が天なる蒼穹を裂く、スーリヤ（太陽神）の天翔る奔馬を壊す、あゝ、それが何。超越、聳然、睥睨する、存在ということの崇高、*thuna* 殷贅羅<sup>ズ</sup>………」

デジタル化された音の塊の洪水が大氾濫し、それを裂き破るかのように、裂のギターが入る。龍肯は恍惚とした。

唐突に鬘のような髪を摩かせて星の海の大空間に立つ自分がわかったからだ。よく考え

ればそれは幻想でなく、普通の現象だ。まさしく地球号は星間に泛んでいるのであるから。頭上には満天の星、足下にも真砂なす無限の数ある星の大海原。上下左右前後も同然。どちらが上か下か、どちらが左か右か、どちらが前か後ろかわからず、上下も左右も前後もなく、物事の漂流を止めるべき『概念』というものが無効化し、どこにも棹を差せない。すべては形がない。流動する。行き場もなく、行き着く場所があり得ない状況、無が一つの概念でしかない以上、無ですらない、『ない』という形も取らない、真の無とも言うべき『ム』、いかなる言葉もそれを表現できず、むしろいかなる言葉でも表現できてしまう、どうしようもなさ、平凡なありふれた雑器のような無際限の自由。ただ、現実。それは荒野だ。恐るべき荒野。上下左右前後は自分で決めるしかない。拠りどころとなるべき根拠などありやうがない。勇猛果敢獅子奮迅の意気のみが気魄のみがこれを決す。人は正しいと思ったことをやるしかない。佛教の古き言葉にかくあり、

諸悪莫作　しよあくまくさ（諸々の悪をなすことなかれ）

衆善奉行　しゅぜんぶぎよう（衆々の善をよろこびほどこせ）

参考までに、この続きは、

自淨其意　じじようい（自らの心のところをきよめよ）

是諸仏教　ぜしよぶつきよう（是れ諸仏の教えなり）

サンスクリット原文は、

Sabba pāpassa akaranam　サッバ　パーパッサ　アカラナン

kusalassa upasampadā　クサラッサ　ウパサンパダー

Sacitta pariyodapanam　サチッタ　パリヨーダパン

etam buddhānu sāsanaṃ　エータン　ブッダーヌサーサナン

その意は、　「もろもろの罪に犯されず　　たくみな生き方に入り　　心を淨らかする  
これがブッダたちのすがた」

「ここでは何が善であるかの説明はない。しかし現実には善で動いていない。理念を絶した倫理で世界は動く。何が善くて何が悪いか。是か非かはきよらさやかであるか否かを、魂魄に問い質して決めるしかない。自然の教えに従って……」

光の潮、大海原が彼を襲い、呑み込み、無みした。美は、~~ま~~は魂を韜晦し、5千兆フ  
イトの高みに引き上げ、超然たる天上の恍惚に導き、人をして崇高に聳え立たせ、奮わ  
せ、昂らせ、超絶の光をも越えて大いなる静寂、涅槃のしずけさ、解脱へと搬び去る。

叭羅蜜斗のベース・ギターのソロの後、普蕭のドラム・ソロを経て、荘厳なエンディン  
グ。大地を揺るがすような大曲が終わる。龍肯は崩れるようにその場にしゃがみ込んだ。  
燃え尽きて老いたかのように。「終わったぜ。そして……わかったよ」

サイケデリックな服を着たベ裂は鉛筆を齧りながらノート片手に考え込んでいた。両脚  
をパイン材のプロバンス風アンティーク机の上に置き、ゴブラン織の安楽椅子に坐ってい  
る。そして終に、「これでどうだ」と言つてメモをよこした。

|    |                         |      |
|----|-------------------------|------|
| 4  | <i>Devil Astarote</i>   | 727  |
| 5  | <i>Country Courtney</i> | 233  |
| 6  | 蝶 <i>papillon</i>       | 351  |
|    | <i>Rock'n Roll Love</i> |      |
| 7  | <i>Letter</i>           | 301  |
| 8  | 豪華なる修羅の戯                | 1007 |
| 9  | <i>Elegy</i>            | 324  |
| 10 | 湖上の城 <i>Ragnarok</i>    | 1224 |
| 11 | 殷弩羅 <i>इंद्र</i>        | 1305 |
| 12 | <i>Harp</i>             | 027  |

曲の配列だ。最初と最後は龍肯が最初に吹いたブルース・ハープの短い録音で、同じ録  
音に異なるタイトルを附してあった。

「バリエーション豊か、コンセプトチュアル、と言えば自画自賛過ぎるか。ま、言いたいよ  
うに言うべきだ。これでいい」

普蕭が言った。叭羅蜜斗も紙を奪い、「おお、いいんじゃないか」龍肯は何度か双眸  
を上下させ、口ずさみ、そして頷き、「うん……いい」

ベ裂が呵々大笑し、「じゃ、OKなんだな。これで決めるぜ。さっそくアップしよう」

遂にアルバムは完成した。ネット上にアップし、またメディアに落としてそれを眞神山  
にある眞神神社に奉納した。4人そろって参拝し、

「イタル、聴いてくれよな」

ベ裂がそう呟いた。しかし実際にはこれで終わりにはならなかった。龍肯がもう1曲作  
ったのだ。それが『人、義しきとおもふを爲す善し』だ。出だしを楽譜にするとこんな感じ。



『Groove』と呼ばれている。前半の超高音(かつては犬にしか聞こえないと言う人もいたが、若い人には聞こえるらしい。歳とともに高音は聞こえにくくなるから、そのように言われるようになったものか?)の部分と、後半の意味不明なお喋りとで構成され、アナログ盤に於いてはアルバム全曲の終了の後、最後の溝(ランアウト・グルーブ)にレコード針が嵌まって針を戻さない限り終わりなく音声が続くという仕組みを利用した、一種のお遊びである。どうでもいい余談だが。

かくしてこの曲はアップロードされたが、曲名表には載せられなかった。眞神神社への追加奉納もなかった。献上というものは一つの区切りの中で1回の方が潔く、それが善いという気がごく自然に起こったからだった。

ただし、イタルに捧げる聖なる儀式として、眞神山の門前までトラックで機材を運び、荷台の上をステージとして、その一曲をライブ演奏した。

「ま、これが一番なんだろうな、奴にとっては……そういうことだぜ」

叭羅蜜斗がそう嘯く。誰も返事はしなかった。

見上げれば鬱蒼たる緑のビルディングのような奇怪な磐山は蒼穹に聳えている。ラグナレクの薄く蒼い双眸のように。

『Very Very well-done』完